

ASSIST AFRICA

The Republic of South Sudan



色彩豊かなカクマの一角。

▶ 渋滞を引き起こしても「我関せず」なヤギとヒツジ。



シャンガをつけ、ケニアの国旗を身にまとう女性。



ピースウィンズ・ジャパン現地レポート

乾いた大地を彩る民族-トルカナ族-

アシスト南スーダン!

今、世界でもっとも多くの国内避難民・難民を抱える南スーダン。その現状が日本に伝えられる機会は少なく、知るすべも限られている。未知の国・南スーダンで何が起り、今どうなっているのか? タウトク編集部では、NGOピースウィンズ・ジャパンの協力により、その現実の姿を伝えていきます。支援活動を続ける同スタッフの奮闘のレポートを紹介しつつ、南スーダンが抱える問題を少しずつひもとき、少しでも身近な出来事だと感じられるようにしたい。

株式会社メディコムでは、読者の皆さんにタウトクを1冊(350円)購入いただくにあたり、その約1%である3円を、南スーダンをはじめアフリカの復興支援のために送金します。

「支援している」という高みに立った目線ではなく、積極的に関わり合いをもつことで現地の様子が気になるようになり、やがて世界で起こっているいろんな紛争や悲劇と、自分たちは決して無縁ではないことを肌で感じるための「3円」だと思っています。ぜひこの1%運動をご理解いただき、本誌連載にご注目ください。

PWJの携帯サイトはこちら!



世界各地で支援活動を続けるスタッフからの「現地活動レポート」、最新のNEWSなどの情報が携帯からチェックできるようになりました! 左のQRコードからアクセスしてみ! <http://www.peace-winds.org/m/>

タウトクでは毎月、南スーダンの国内避難民・難民支援事業へ送金した金額=タウトクの販売部数×3円を読者のみなさんにお知らせします。

タウトク10月号の販売部数

5,727部×3円=17,181円

を支援金としてPWJを通じ南スーダンの国内避難民・難民支援事業に送りました。

peace winds
JAPAN

月刊タウン情報トクシマ
タウトク

medicomm inc

株式会社メディコム

月刊タウン情報トクシマ編集部

ケニア北西部、南スーダンとの国境沿いに位置するカクマ難民キャンプ。PWJはここで南スーダンからの難民への支援を実施しています。私は10月からカクマ駐在員としてPWJスタッフになりました、富樫と申します。今回は難民キャンプが設置される以前からカクマ周辺に住んでいるトルカナ族をご紹介します。

私が思うトルカナ族を表すキーワードは3つ。「カラフル」「スペシャリスト」「遊牧民」です。

まずは「カラフル」。写真を見ていただくとお分りになるように、トルカナ族の女性の服装はカラフルでオシャレ。シャンガと呼ばれる彩り豊かな首飾りを身に付け、身体には東アフリカの布であるカンガなどを巻いています。カンガには主に東アフリカで使われているスワヒリ語でメッセージが一つだけ書かれており、それはことわざであったり信仰についてであったり愛についてであったり。もしかしたら、意中の相手にさりげなくカンガでアピールしている女性もいるかもしれませんね。



シャンガとカンガでオシャレする女性。

次に「スペシャリスト」。何のスペシャリストかと言うと、牧畜です。トルカナ族は伝統的に牛、ヤギ、ラクダなどを飼い、牧畜を生業としてきました。そんな彼らにとって家畜の飼育はお手の物。家畜はお金の代わりでもあり、家畜が多いことは貯金が多いことを意味します。カクマでは、飼い主が見当たらないのに、いくつものヤギの群れが道路を我が物顔で歩いている光景を目にします。彼らにも帰巢本能があるのか、自由気ままに草を食べた後、自主的に飼い主のもとに戻るとのことです。

最後に「遊牧民」。前述しましたが、トルカナ族は長らく家畜と共に生活をしてきました。彼らが住むトルカ

ナ地域は雨がなかなか降らない半砂漠地帯。インフラが整っていないため、季節ごとに水や家畜の餌となる草を求め移動を繰り返します。そのためか、トルカナ族の伝統的家屋は細い木や草葺きで建てられた非常に簡素なものです。



伝統的家屋の前で写真に納まる子供たち。

もちろん全てのトルカナ族がこのような服装・生活をしているわけではありません。一つの場所に定住し、日本の皆さんと同じ様な服に身を包み、スマートフォンを操ってビジネスをし、テレビで流れる欧米サッカーの中継に一喜一憂している人もいます。

カクマにおけるトルカナ族のように、難民キャンプができる地域に元々住んでいる人びとで構成された社会、つまり難民を受け入れる側の地域社会を「ホストコミュニティ」と呼びます。トルカナ地域はケニアの中でも特に貧しい地域とされ、トルカナ族より難民の方が食糧や水、教育の機会などに恵まれているのが垣間見られることがあります。そのため、キャンプ内で難民を相手に商売をするトルカナ族を度々目撃します。このような中、難民ばかりを支援するとホストコミュニティと難民との間に軋轢が生まれ、また、難民を支援しているPWJとホストコミュニティの関係悪化を招く可能性があります。これを防ぐため、PWJは難民支援に必要な資材をホストコミュニティから調達したり、ホストコミュニティの人びとに仕事を依頼することがあります。このような小さな積み重ねが、カクマに暮らす様々な人びとに、安心・安全な生活環境をもたらすのかもしれない。今後もPWJは難民だけではなく、難民を受け入れるホストコミュニティへも配慮しながら、難民がいつか自国に戻れることを願いつつ、今後も支援を継続していきます。

カクマ駐在 富樫 良輔